

LD児支援プログラムのユース・ボランティア活動

—北海道YMCA LD児プログラム ボランティア養成のために—

二宮 信一 太田 深雪 滝澤 聡
(北海道YMCA) (札幌市立南月寒小学校)

<要旨>

LD児の教育的支援が乏しい環境の中で、北海道YMCAは1995年よりLD支援プログラムを関係機関との連携の中で開始し、2000年7月現在138名に及ぶ子ども達が通うに至っている。その中で小学生から高校生までもを対象とし毎月第2土曜に行なわれるアクティブ・クラス（高校生はドリーム・クラス）には、LD講師の指導のもと多くのユース・ボランティア（YMCAではリーダーと呼ぶ）がプログラムの立案、指導、評価の中心となって活動している。ボランティアといえども、LDへの基本的な理解が不可欠であり、指導上その専門性が必要とされる。そのため、子ども達が参加するクラス（通常「例会」呼ぶ）への参画と平行して、ボランティアがプログラムの立案、評価のミーティングを行なう「リーダー会」と、LDへの基本的な理解や指導法を学ぶ「LD学習会」が、相互に関連し合いながら実施された。LD指導ボランティアの養成にはこれらの有機的な繋がりが必要であることが明らかになった。

<キーワード>

LD児、ユース・ボランティア（リーダー）、意識変化

はじめに

1995年より開始された北海道YMCA（以下YMCAは札幌YMCAを指す）のLD児及びその周辺の子どものための援助クラスは、2000年7月現在138名の登録があり、アクティブ（ドリーム）・クラスと名付けられた月1回、第2土曜日に活動しているクラスには37名の小・中・高校生が参加している。LD児の指導には、一人ひとりの発達のバランスの悪さを理解する専門性が必要とされ、それゆえ通常のクラスは講師による指導が中心となっているが、このアクティブ・クラスはYMCAのスタッフ及び講師の他に多くのユース・ボランティア（以下リーダーと呼ぶ）によって運営されている。このアクティブ・クラスはLD児のソーシャルスキルトレーニングの場として設定されているが、彼らの社会的な活動の場を広げていくためにもLD児指導のできる専門性を持った多くのボランティアが必要でありその育成

は急務の課題であると言える。

本稿は、2000年度に行なわれたアクティブ・クラスの活動を通して、LD指導ボランティア養成について検討した。

1、アクティブ・クラスの概要

月1回、第2土曜日に行われるアクティブ・クラスはLDクラス開設の翌年、1996年4月より開始された。例会は午前10時から午後3時までの5時間の活動である。グループは3-5人を基本とし、1-2名のリーダーが指導にあたる形で構成されている。開設当初は、小中学生を対象として開始されたアクティブ・クラスも、子どもの成長に合わせ98年度より高校生のクラス（ドリーム・クラス）が開設され、活動の幅を広げてきた。プログラムは「ソーシャルスキルの向上をねらいとしてグループ活動を基本に、自分たちで計画したことを実行する体験学習型のクラス」として行われている。グル

ープでの活動を基本としつつ、活動の中で「考える」「調整する」「実行する」「見直す」などの経験を積むこと、また、相手の考えを受け入れるなど、仲間作りも考慮した活動を行っている。交友関係の乏しい参加者にとっては、数少ない自分が認められる場であり、日々のストレスの発散できる場として月1回の例会を楽しみにしている。

2、2000年度の活動から

1) 参加者状況

2000年度の参加者数は37名でグループ数は9であった。その中には旭川などの遠方からの参加もある。表1は、2000年度の参加者分布である。

表1 2000年度アクティブ・クラス参加者分布

	男	女	合計
小学生	9	3	12
中学生	13	4	17
高校生	6	2	8
合計	28	9	37

2) 活動内容

(1) 例会

年間9回の例会が行われ、表2の活動を行った。これらの活動はすべてリーダー会で話し合わせ、企画段階からリーダーの手により準備された。

(2) リーダー会

リーダー登録は男8名、女12名、合計20名で、社会人1名(男)、学生(大学、専門学校等)19名であった。運営のための負担が一部のリーダーに偏らないために毎月回り番で決める「世話人会」(3名程度)によってプログラムのテーマ・素材など運営の全般的な検討がなされ、その世話人から出されるプログラムの修正、準備及びグループやLD児一人ひとりの課題を考える「リーダー会」が基本的に週一回行なわれた。その他、例会の前日に準備として集まり、例会終了後、個人記録・グループ記録の記入と反省・評価のミーティングがもたれている。表3は、2000年度のリーダー会の活動内容である。リーダー会、世話人会あわせて年間で47回開

表3 2000年度リーダー会活動内容

例会	回数	話し合いの内容
5月	4-5月 5回	L会開催日決め、世話人決め 5月例会内容 Lの役割・MにとってのLの存在意味 例会反省、評価 Gの様子・個々のMについて、今後の課題
6月	5-6月 3回	6月例会内容、記録用紙の形式について、 例会反省、評価
7月	6-7月 4回	7月例会内容 アクティブの目的・楽しみの質について 例会反省、評価
9月	8-9月 5回	Gの課題、9月例会内容、プログラム研究(楽器づくり) 例会反省、評価
10月	9-10月 9回	10・11月例会内容 例会反省、評価
11月	10-11月 4回	11月例会内容 例会反省、評価 Mの新しい課題
12月	11-12月 6回	Gの課題をもとにゲームを作る、G個別の目標 12月例会内容、ゲームの工夫 例会反省、評価、Lの連携
2月	1-2月 5回	2・3月例会内容、ゲーム大会の目的確認 例会反省、評価 Mの状態にあわせての接し方・情報の提供の仕方
3月	2-3月 6回	3月例会内容 例会反省、評価 Mの成長、来年度について(プログラムの立て方・考え方・ねらいの確認・反省の生かし方)

Lはリーダー、Mはメンバー(LD児)、Gはグループを指す

催され、リーダー会の平均出席者数は8～9名であった。リーダー会の話し合いの柱は、例会の内容と進め方である。年度初めには、リーダーとしての心構えとなるような学習も盛り込んだ。前半はリーダーもグループも新しいため、例会で何をするか話し合う時間が多いが、中盤からグループ個々の課題が整理され、それに合わせて内容を検討するようになった。後半になるにつれ、さらに子どもを中心とした話し合いが展開され、接し方の工夫も話題にのぼった。プログラム提供者から指導者へと、リーダーの自覚が深まり意識変化に繋がったと言える。

表2 2000年度 アクティブ・ドリーム・クラス 活動一覧

		ア ク テ ィ ブ		ドリーム
		小学生	中学生	高校生
5月	テーマ	グループ自慢大会		自己紹介アンケート大会
	ねらい	グループで仲良くなる。グループ内の交流を深める。		
	ゴール	活動の記録を主体的、能動的に書けること。または、その発言がみられること。		お互いが知り合える。
6月	テーマ	ビックすごろくで遊ぼう	すごいものを作ろう	お出かけ計画第1弾 (古い札幌を探そう)
	ねらい	一人一人が作ったものを一つの作品にまとめて遊ぶことで、連帯感を味わう	グループで一つのものを作る。グループで結集する(体験をする)	たくさんの事を体験する。
	ゴール	作ったすごろくで他のメンバーと楽しく遊ぶことができる。	相手の気持ちを考えた行動ができる。	様々なものに関心をもつ。地域の施設の活用方法を学ぶ。
7月	テーマ	ボートにのろう!!		お出かけ計画第2弾 (公園めぐり)
	ねらい	普段体験したことのないことをする。みんなで盛り上がる。		いろいろな体験をする。
	ゴール	積極的な行動、安全に配慮した行動ができる。		様々なものに関心をもつ。地域の施設の活用方法を学ぶ。
9月	テーマ	楽器を作って演奏しよう		お出かけ計画第3弾 (新しい札幌めぐり)
	ねらい	手や指の動きを意識しつつ、作品(楽器)を作り上げる。みんなで演奏する楽しさを知る		自分たちで出かける計画を立てる
	ゴール	自分なりの工夫(形・色)を取り入れた作品づくり。道具(はさみなど)を安全に気をつけて使える一緒に演奏し一体感を味わう		立てた計画通りに実行する。
10月	テーマ	ピストロ・アクティブ食欲の秋編		お出かけ計画第4弾 (おいしい札幌を探す)
	ねらい	みんなで協力しながら料理やゲームをする楽しさを知る。	グループ内の協力、交流。自分のグループ、他のグループの料理をほめる。	情報を収集し、選択、実行する。
	ゴール	作ったという達成感を味わい、自分や他のメンバーの作業を評価し合える。		立てた計画通りに実行する。
11月	テーマ	みんなでゲーム	大通り不思議発見	お出かけ計画第5弾 (工場へ行く)
	ねらい	見通しを持ってゲーム作りをすることができる。他のグループを楽しませることができる。	グループで相談する(自分の思いを表現、伝える。他のメンバーの話聞く。)	仕事に関する関心を促す。
	ゴール	作ったゲームを理解し合いながら楽しむことができる。	グループ内の相談が、より深まる。皆で楽しく行動する。	自分の将来について考えることに気づく。
12月	テーマ	クリスマスハウスを作ろう	てづくりクリスマス	クリスマス会
	ねらい	みんなで力を合わせて一つのものを作る	自分達で企画したクリスマスを楽しむことができる。	将来の夢やなりたい職業について話す。来年の抱負を語る。
	ゴール	クリスマスを意識し、楽しむ。	企画に積極的に参画する。	自分の将来について考える機会を提供する
2月	テーマ	そりにんげんコンテスト		未来日記
	ねらい	グループで一つのことを共同制作して、それをグループで使用することで、喜びなど感情の共有を図る		1年後、10年後の自分について考える
	ゴール	共同作業そのものを楽しむ。達成感を共有する。		自分の将来を表現する。
3月	テーマ	メモリアルここにアルパーティ		クッキングパーティ
	ねらい	一年間のグループでやってきた積み重ねの成果となることを行い成長を実感する		一年の振り返り。
	ゴール	一年を振り返る。成長の成果の証となるようなものをグループ毎に行なう		グループとしての最後の例会を楽しむ

(3) 学習会

2000年度の学習会は表4の通りであり、平均参加者数は11～12名であった。

表4 2000年度LD学習会

	日程	テーマ	担当
1	5/15	LD基本理解	講師
2	6/19	認知カウンセリング基礎1	教員
3	7/10	知能検査活用法	専門家
4	8/28	認知カウンセリング基礎2	教員
5	9/25	ソーシャルスキル理解	講師
6	10/23	認知カウンセリングの実際	教員
7	11/27	ソーシャルスキルトレーニング	講師
8	12/12	LDの理解と支援	講師
9	1/22	事例研究の進め方	教員
10	2/19	アメリカでのLD支援	講師
11	3/12	LD指導の実際	専門家

専門家は教育相談室指導主事・医師、教員は小学校教諭、講師はYMCA・LD講師である

LD児指導ボランティア養成の中に、LD理解を含めながら実際の指導についても考えていかなければならなかったのは、わが国におけるこの領域に関しての確立された指導法というものが存在しておらず、試行錯誤の状態にあるからである。そこで、市川伸一氏（東京大学大学院教育学部教授）によって提案・開発された「認知カウンセリング」という方法が、LD児指導を進めていく上で有効な指導法となりえるのではないかという仮説を立て、学習会を積み上げた。LD児を扱った事例報告はまた1例しかないが、このアプローチをLD児指導に導入することで、ボランティアが自信をもって彼等に学習支援を実施できるのではないかと考えた。

わが国の教育では、指導や支援に関する方法論において、経験や勘に頼ったものが多いといわれている。これでは、ベテランの教員にならなければ効果的な指導や支援ができないことになってしまう。LD児指導にかかわってくれるボランティアは学生がほとんどで若い担い手が圧倒的である。彼等がある程度の専門性を獲得するためには、どうしても科学的手続きに則ったものが必要になってくる。「認知カウンセリング」は、その考え方・臨床的実績・方法論においてLD児指導のボランティアが十分に獲得できるスキルであると、学習会を積み上げてみて確信した。今年度は、「認知カウンセリング」理

解と「LD児への適応」にとどまったが、次年度以降、実際にこの学習支援の方法をLD児に適応させ、その効果について検討していくことにしている。

3. 考察

リーダー会でのミーティング内容の変化は、例会を通して子どもたちとの関係が深まり、学習会を通してLDをより深く理解することができるようになったことによる意識変化であり、「担当した子どもの課題」の発見が大きな契機であったと考えられる。それゆえ関心はかなり個別化された形で現れてくるが、むしろそれがLD指導の専門性の獲得や活動への意欲となって表れると共に、LD児達が置かれている状況の全体像を捉えようとする問題意識へと発展し、充実した活動が行なわれたのではないかと考えられる。

ボランティア活動は「子どもとの出会い」から始まる。それゆえトレーニングを有効に積み上げていくには、学習会のようなLD児全般に渡る理解、指導法のトレーニングと共に、リーダー会における「直接担当している子ども」の課題に関する議論そのものもトレーニングとなっている。この両者の連携と指導現場である例会の有機的な繋がりが、学びを深めるために有効であると考えられる。

LDという問題そのものがまだ一般に理解されていない状況の中で、LD児自身は家庭や学校においてなかなか理解されない困難な生活を送っており、対処療法的にもアクティブ・クラスのような活動の場が求められる。そして、このようなボランティア活動を通してLD児を理解し、指導にあたる層が拡大されていくことは、LD児・者を受け入れる地域づくりにおいて、その素地を作っていく活動でもあると考えられる。そのような意味で、今後の課題としては、ボランティアの獲得が第1にあげられるが、それと同時にLD児指導とボランティア養成の両方の視野を持ったスタッフの育成も合わせて考えていかなければならないだろう。